



Title	社会の生成と生命 : ベルクソンの社会論
Author(s)	陀安, 広二
Citation	メタフュシカ. 1998, 29, p. 73-86
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66977
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

社会の生成と生命

—ベルクソンの社会論—

陀 安 広 一

ベルクソンは『道徳と宗教の二源泉』で独自の社会論を開発するが、その特色は、端的に言つて、社会の生成を生物学的視点から捉えることにある。「社会はそれ自体では説明されない。ゆえに、社会的な獲得物の下を探り下げ、生命にまで至らなければならぬ。諸々の人間社会は、人類と同様に、生命の顯現したものに他ならない」(1060)。

具体的な社会形態、風習や制度において見れば、個々の社会は、言うまでもなくそれぞれに異なつてゐる。だが、ベルクソンによれば、教育によつて伝達される後得的な習慣を取り除けば、あらゆる社会は、等しく、生命の現れと見なされ得る。社会について考察するということは、ベルクソンにとって、とりもなおさず、社会としての現れを可能にしてゐる生命について考察することなのである。

誤解してはならないが、そのように生命的な立場から社会を考察するからといって、ベルクソンの社会論は、スペンサーに

代表される生物学的・社会学と類似性をもつのではない。スペンサーは、当時隆盛を極めた進化論的思考に依拠しつつ、社会をいくつかの形態に類別し、それら形態間にある種の進化を見出そうとする。彼にとって社会形態はその進化の程度に応じて相互に異質的なものとなるが、一方、ベルクソンはむしろ社会の進化を否定する。社会形態相互の異質性が存在することは事実だが、その異質性はただ後得的な習慣の違いに起因するのであって、それら習慣を取り払えば、あらゆる社会は構造的な同型性を露呈することになるのである。両者はともに社会形態の異質性を認めはするが、スペンサーが、異質性を進化という一種機械論的な原理の下で理解し、それ自体還元不可能なものとしてしまうのに対し、ベルクソンは、異質性を後得的な習慣の異質性と理解し、その基底に生命的な同型性を見るのである。

こうして、ベルクソンの社会論の対象は、人間社会のあらゆる諸形態から、本能によつて統御された動物の社会、そして細胞

の集積としての有機体まで拡がり、しかも、それらは、その基底にともに生命が働いている限りにおいて、同一の構造を有すると言われるのである。

」のように、ベルクソンは、現実の社会の基底を掘り下げ、あらゆる社会が基礎を置いている生命を明らかにする。言ふ換えれば、ベルクソンは社会を「単純事実 simple fait」(*ibid.*)と見ることを拒否するのである。⁽¹⁾社会学の課題は、一般に、個々の社会形態をそれぞれ還元不可能な事実と見なし、そのようにして得られる多種多様な事実を各々に即して比較・考察する」とにあると言えるかもしない。だが、ベルクソンにとって、本来的な意味で社会的なものとは、事実と見なされている個々の社会形態ではなく、社会の基底に存し、社会を社会たらしめている生命的傾向なのであり、したがつて、個別的な社会形態の考察は副次的な意義しかもたないのである。

我々が本稿で問題としたいのは、」のように考えられた社会論において、個人と社会とがどのような関係を成すのかといふことである。一般的に言つて、個人と社会のどちらに重きを置くかによつて、一方では、社会とは個人間の契約に由来する偶然的なものであることになるだろうし、また他方では、反対に、社会こそが実在であつて、個人は單なるその抽象にすぎないと云ふことになるだろう。もちろんこれらは極論でしかないが、仮に折衷的な立場を探るとしても、ベルクソンの社会論からは

どれも等しく隔たつてゐると考えられる。すなわち、どの立場を探るにせよ、個人と社会とは、どういふ形であれ、あらかじめ分離されてゐるのであり、諸個人の連合によつて社会が形成されると考えるか、社会という基体のうちから諸個人を抽出するかの違いであろう。それに対して、我々の考えでは、ベルクソンの社会論は、個人的なものと社会的なものとをいわば内在的な関係に置くことに存する。以下、」の内在的な関係について、その意味を限定していきたい。

責務の全体

顕在化した社会の基底に存する共通の生命的構造とは何か。

ベルクソンによれば、「人類がどんなに文明化し、社会がどんなに変化するとしても、社会生活へのいわば有機的な諸傾向 tendances organiques は、起源においてあつたとおり残存している」として、「有機的な諸傾向」あるいは「自然的な諸傾向」、「自然の方向」と呼ばれるものが、顕在化した社会の基底において働いてゐるものであり、そしてまさにそのために、

それは我々の意識には判明に現れることがない。⁽²⁾それは内容を欠いた「形式 forme」であり、その内容の方は、社会の変化に応じて理知的になつたり整合的になつたりするが、「形式」そのものは「我々の道徳的本性のうちで還元不可能で常に現存す

るもの」であり続ける。⁽³⁾

「有機的な諸傾向」ないし「自然の方向」が、本能的社会を含めたあらゆる社会に共通の傾向であるといつても、人間社会と本能的社會、及び有機體とは、そのあり方が異なっている。人間社會は自由意志を備えた個人から成り立つてゐるからである。「これらの意志がいつたん組織化されると、それらは有機體を模倣し、このいくぶん人為的な有機體においては、自然の成果において必然性が果たすのと同じ役割を習慣が演じる」(982)。「有機的な諸傾向」は人間社會において習慣として存在するのであり、すなわち、習慣は、知性的な発展を遂げた人間社會にあって、ちょうど本能が動物を拘束し、また自然的紐帶が有機體を統一するのと同じ役割を果たしているのである。言い換えるなら、それは個人を社會に結び付けるために人間社會に残存する「潜在的本能 *instinct virtuel*」のようなものと考えられるのである。

ところで、習慣の拘束力は、もし我々が習慣のうちに完全に埋没してしまつてゐるなら、我々にはそれとして感じられる」とはないと思われる。習慣から逃れようとする意識が現れ出るそのときに、我々はその力を感じるのである。習慣のもつ必然性はそのように「それから逃れ得るという意識を伴いつつ」(985) 感じられるのであり、人間社會に特徴的なそうした感情を、ベルクソンは「責務の感情」と考へてゐる。

しかしながら、ここでは個別的な習慣が問題となつてゐるのではない。個別的な習慣は社會の諸形態に応じて相異なるものであるが、社會の諸形態の基底を探ろうとするベルクソンにとって問題なのは、むしろ習慣を習慣たらしめている習慣なのである。「(…）それらの総体、いわば諸々の習慣を習得する習慣は、社會の基底そのものにあってその存在の条件をなし、強度と恒常性において本能の力に比較可能な力だろう」(996-997)。個別的な習慣の単なる総和ではなく、まして個々の習慣でもない習慣、言い換えれば、個別的な習慣の獲得を可能にするような習慣が、ここで主題化されているのである。

それと同様に、個別的な責務が問題となるのでもない。ベルクソンの言う「責務の全体 *tout de l'obligation*」は、個別的な責務を積み重ねた限りにおける「全体」ではない。「責務の全体」とは「諸部分の合成 composition」(983)なのではなく、いわば「各細胞がその要素を成す有機體の背後から吸い上げてゐる、不可分で完全な生命の息吹」(*ibid.*)にたとえられるべきものである。社會生活への「有機的な諸傾向」は人間社會において「責務の全体」として感じられるが、それは、あらゆる個別的な責務の現れを可能にするようなものとして感じられるということなのである。

要するに、ベルクソンが社會の基底に見出そうとする生命とは、單なる「形式」としての社會生活への「有機的な諸傾向」

であり、我々はそれを習慣として、あるいは「責務の全体」として経験するのである。

本能と知性

すでに述べたように、「責務の全体」はそこから逃れ得るという意識とともに我々に経験される。では、この意識はどのようなものだらうか。

人間社会は自由意志をもつた個人から成り立つ社会である。そして、人間が自由であることが、まさに、社会の基底に存続する自然的なものが「責務の全体」として経験されるための必要条件を成していると言つことができる。「人は自由である場合にしか責務を感じない」(999) のである。この自由は人間知性のもつ反省能力のことであつて、反省能力は閉じた社会的凝集を解体する力をもつ。端的に言つて、知性は「利己主義」(1053) <向かうのである。つまり、「我々各人は、自己自身に振り向けば、自分の好みや欲望、あるいは気まぐれに従い、他人を考慮しないのは自由だとはつきりと感じる。しかし、そういった気持ちが起つるや否や、蓄積されたあらゆる社会的な力によつて構成されているある対立する力 force antagoniste が生じてくる」(985) のである。この「対立する力」が「責務の全体」であり、それは知性のもつ社会の解体能力への自然の重

石として働くのである。

このように知性が社会を解体する力であることを、ベルクソンは『創造的進化』のなかすでに示唆している。

ベルクソンによれば、「完成した本能は、有機的な道具を利用し組み立てねえする能力であり、完成した知性は、非有機的な道具を作成し使用する能力である」(614)。本能は自然の延長でしかないために、その利用する道具は、優れた完全性を示す代わりに、利用対象が限定される」とになる。「本能は、一定の道具を一定の対象に利用することでしかないために、必然的に特殊化されてくる」(ibid.) のである。有機的な道具が身体のことであるとするならば、本能は限定された対象を行つて知る能力と考へる」とができるだろう。言い換えれば、本能は、行為によつて対象との特殊な閉じた関係を形成する能力なのである。

一方、知性の使用する非有機的な道具は、「本能のよう」に、動物の行為の田 cercle d'action を閉じてしまつて、そのなかを動物が自動的に動くよつにさせるのではなく、そつした活動に対して無限の領域を開いてやることによって、その活動をますます遠くまで後押しし、ますます「自由にする」(614-615)。本能がある一定の事物のみを行つて認識する能力であり、そのようにして事物との間に限定された関係を立てる能力だとするならば、それに対して知性は、單なる形式としての諸関係をそ

の外延を様々にずらしつつ繰り返し立てようとする能力であり、本能が一定の関係の設立にとどまらずとするのに絶えず反発する能力であると考えられるのである。

言い換えるれば次のようになる。本能によつて行動する動物が、反省された一般観念を形成することはないにしても、行為によつて一般化する能力をもつことを、ベルクソンは『物質と記憶』⁽⁴⁾のなかで明らかにした。草食動物は、草一般に惹き付けられることを通じて、何らかの一般性を生きている。ところで、一般化する能力が備わっていることが、広い意味で言葉の存在を意味するなら、本能によつて行動する動物にも何らかの言葉が存在すると言えるだろう。もつとも、「この言葉を構成する諸記号は数のうえで限定されており、その各々は、いつたん種が形成されると、ある対象やある働きに変わることなくつなぎ止められたままであるに違いない」(629)。一方、記号がその結びつく対象を次々に変えていき、そのように「語の可動性」(*invar.*)をもつことが人間の言語の特徴である。こうして見ると、本能は、対象に厳密に一対一対応した記号の数の分だけ関係を立てながら、そのようにして特定の関係の創設でもつて閉じてしまつてゐるのであり、それに對して知性は、その内包を空虚にしておくことで、記号を無限に多くの対象に向かつて開いているのである。つまり、そのように無限に多くの関係を立てることを通じて、本能に見られるような特定の関係の解体を目指し

てゐるのである。

さて、ここで「人は自由である場合にしか責務を感じない」というベルクソンの言葉の意味を考えてみよう。自由である場合にしか責務を感じず、そして、責務を感じるということが社会は存在し得ないということになるだろう。だが、それは、知性という解体力が社会の存立の必要十分条件を成しているといふことではあるまい。人間の自由意志の発現を待つてはじめて責務が感じられるとはいへ、当の自由意志が責務を作り出したとは考えられないからである。したがつて、ベルクソンの言明にもかかわらず、一方で、次のように言つこともできる。社会生活への「有機的な諸傾向」は、それに抵抗する人間の自由意志の発現を介すことによつてはじめて、「責務の全体」として感じられるものとなるが、しかし社会生活への傾向そのものは、権利上、自由に先行していた。

つまり、知性という解体力と「責務の全体」という凝集力は、どちらが先行するのかにわかには言いがたい関係にあるといふことである。本能による結びつきにおいて、なるほど事物の必然的関係以上のものがそこに予示されていると考えられ、広義における社会的関係がそこで成り立つていると見られるかもしれないが、にもかかわらず、やはり本能は人間社会のもつその固有の連帶を説明しはしないだろう。すなわちそれは、相反す

る一つの力の拮抗によって成り立つ関係である。それぞれの力が他方の力に対する抵抗としてのみ存在し、両者がそれぞれ他方の力を自らの存立の条件として要求するならば、このとき、どちらがより根源的な力であるのかを明言する」とは不可能であろう。このように見るならば、我々は、つまるところ、二つの力が拮抗し、どちらが先行するのか言いがたいこの一種独特の局面において、社会の生成を見出すことになるのだろうか。

個人的なものと社会的なもの

問題は、このように見られた場合、社会的なものと個人的なものとの関係がどのようなものかという点にある。「社会が存在し、したがって社会がその成員に必然的に強制を与えるのであり、この強制が責務である」と人は好んで言う（1060）。この記述から窺えるように、ベルクソンの社会論が拒否するのは、このように社会を「單純事実」としてあるいは「最高権威 autorité suprême」（*ibid.*）として扱い、生命の顯現としてのそのコントекストを無視する立場である。だとすれば、ベルクソンの社会論の主眼の一つは、「最高権威」として自足している社会が個人に対して外部から働きかける、という構図を退けることになると考えられるのである。

実際、デュルケムに対するベルクソンの批判は、まさにその

点に関わっている。「この集合的な精神が我々の精神とは別の仕方で実在を表象するのは当然である。それは別の本性に属しているのだから。社会は固有の存在様式を、したがって固有の思想様式をもつのである」（1063）と述べるデュルケムは、集合的表象の個人的表象に対する外在性を主張する。ここでデュルケムの理論に深入りすることはできないが、彼の理論が、端的に言つて、社会的なものと個人的なものを分離し、社会をそれ自身一つの実在として個人の外部に位置づけることに存するならば、ベルクソンの批判はまさにその社会の外在性に対しても向けられるのである。⁽⁵⁾ すなわち、ベルクソンは、「どうして社会的精神性 mentalité が個人的精神性に内在的 immanente でなかろうか」（1065）とデュルケムに対し異議を申し立てるのである。

しかしながら、これまでの分析を見る限り、ベルクソンの社会概念も個人に「外在的」なものではないかと依然として疑うことができる。ベルクソンは、具体的な社会の諸形態の基礎を掘り下げ、単なる形式としての社会生活への「有機的な諸傾向」を見出した。それは、社会の形態上の諸変化の底にあって、原始社会や文明社会を通じて一貫している不变の自然的な傾向である。このように、ベルクソンが社会論の根幹に据えた、本来的な意味における社会的なものとは、すでに出来上がった社会の諸形態ではなく、社会生活へ向かう自然的な傾向、すな

わち、社会を社会たらしめている自然的な傾向の」となのである。ところが、にもかかわらず一方で、この傾向は、知性の解体力の発現を待つてはじめて感じられるものとなる。すなわち、それは、知性の解体力に抵抗する「対立する力」として経験されるしかない。だとすれば、この傾向は、知性の可能にする自由を拘束すべく、その外部から、強制として作用すると考えられるのではないか。したがって、社会が「最高権威」を失い、その成立根拠をその基底に存する自然的な傾向へ引き渡すとは、いえ、」のよう見る限り、やはりベルクソンにおいても、社会的なものは、個人的なものに対して外在的なものにとどまるようと思われるのである。

」の疑問を解くために、「勧告 recommandation と説明 application は別ものである」(991) ところべルクソンの言葉に着目する。ベルクソンによれば、カント説の流れをくむ道徳論は、責務を「自己自身に対する努力 effort sur soi-même」であるとは「自己自身に対する抵抗 résistance à soi-même」へ特義する。自己の外部にある何らかの規範によって自己を律する」と、いに責務の本源があるとこうのである。しかし、それは彼らが、本来「平穏で、傾向性 inclination に似た状態である責務の感情」を、「責務に対するのに打ち勝つためにしばしば我々が経験する動搖 ébranlement」へ巡回していくことへ」と示してくることである。⁽⁶⁾ 」の道徳論は、責務を「自己自身にして抵抗する努力として規定するのは誤りである。身体の運動

対する努力」と規定する」とによつて、なるほど、我々に「勧告」を行い、その規定は「実践的格率」として機能する。しかし、ベルクソンの考え方では、だからといって、それは責務の「本質 essence」や「起源 origine」の「説明」にはなつてこないのである。⁽⁷⁾

これと同様に、社会生活への「有機的な諸傾向」が、知性の解体力の発現を待つてはじめて感じられ、その際、知性の解体力に抵抗する「対立する力」として経験されるとしても、そのとき感じられる抵抗感や努力感は、「有機的な諸傾向」の「本質」や「起源」には本来帰属してはいないと考えなければならない。つまり、その「本質」や「起源」において見る限り、「成り行き laissez-aller」や「放任 abandon」と見なされるべきある種の「傾向性」が認められるのであり、したがって、い」では、自己に外的なものが呈するであろう強制的性質をいかんかも帶びていはない」と語り得るのである。

」の」をベルクソンは次のよくな例で説明している。⁽⁸⁾ リュウマチの発作が始まると、人は筋肉や四肢を動かすのに非常な苦痛を強いられる。つまり身体器官の運動がリュウマチ疾患に対して抵抗する感覺を感じる。しかし、そのことから、通常の状態においてもリュウマチ疾患が身体運動に初発的状態で内在してくると考え、四肢を動かす運動能力をリュウマチ疾患に對して抵抗する努力として規定するのは誤りである。身体の運動

能力は「基礎的な諸々の習慣の総体」であつて、その習慣の各々に關して、それが含んでゐる専門化された運動のうちに「それ固有の説明 son explication propre」(992)を見出す必要があるのである。

また、ベルクソンは『創造的進化』のなかで、習慣的行為とその意識について説明している。⁽¹⁰⁾ 習慣的行為はその遂行を妨げる外的障害にぶつかる」とよつてはじめて通常の意味で意識的になる。だが、それは、それまでの習慣的行為の遂行において意識が存在せず、障害の介入によつてはじめて意識が存在し始めるという」とを意味するのではない。ベルクソンによれば、〈意識〉は依然として存在していたのであり、ただ行為の遂行自身によつて行為の表象が相殺されていただけなのである。つまり、「障害は何ら積極的なものを創出しなかつたのであり、それは單に隙間を作つて、塞がりを除去した」(617)にすぎない。したがつて、習慣的行為を遂行していく際の〈意識〉は、行為が障害にぶつかつたときに発する意識によつては説明され得ない。」の後者の意識は「躊躇 hésitation」を意味するが、それは、習慣的行為とは全く無関係であるとは言えないまでも、少なくともその「本質」や「起源」には帰属してはいなし、行為の遂行に固有の〈意識〉を説明しはしないのである。

「有機的な諸傾向」の「本質」や「起源」についても、これと同じように考えなければならない。この傾向は、知性の解体

力に抵抗する「対立する力」として経験されるしかないとはいえ、そうした経験そのものは、傾向の「本質」や「起源」を明らかにはしない。」の傾向は、意識に現れる経験としては、たしかに、知性の可能にする自由を拘束すべく、その外部から、強制として作用するようと思われる。しかし、その「本質」ないし「起源」は、知性の解体力に対する抵抗なのではない。むしろ知性という障害が二つの力の拮抗関係を作り出したのであり、にもかかわらず、それは傾向自体に何ら積極的なものを付加しなかつたと考えなければならない。したがつて、傾向そのものの中には、本来、自由と必然との対立は含まれていないのである。こうして、「有機的な諸傾向」という自然的な傾向においては、個人的なものと社会的なものとが、ちょうど習慣的行為において行為の表象が行為の遂行によつて相殺されているように、互いに過不足なく中和し、対立することなく融合していくのであり、両者は内的に関係していると考えられるのである。

社会的自我

社会的なものと個人的なものとの内在的関係を、ベルクソンは自我的構造を分析することによつて明らかにしようとする。

「責務は正確に言つて外部から到来するのではない。我々各人は、自己自身に帰属しているのと同じだけ、社会に帰属してい

るのである」(986)。我々のうちに社会に帰属しているこの部分は「社会的自我 moi social」と呼ばれる。

「(…) 我々自身の表層において、我々は、他の人間たちと連続しており、彼らに似かよつており、彼らと我々の間に相互依存を設ける規律によつて彼らに結び付いてゐる」(*ibid.*)。」の自我の表層は、我々の自我に屬しながら、同時にすでに「社会化され *socialisé*」でいる。この「社会的自我」は我々のうちにあつて、社会の何ものかを我々自身のうちにもたらしているのである。しかも、「我々のうちに社会の何ものかがないならば、社会は我々に対するいかなる作用も与えない」(987) とされ、そこからすれば「この社会的自我を養うことが、社会に対する我々の責務のうちで本質的なことである」(986-987) ともいふ言ひ得るのである。

誤解してはならない。社会が我々の外部にまず存在し、次いで、我々がこの社会との関係を「社会的自我」を形成しつつ取り結ぶのではない。我々の自我の構造そのものに、社会生活を可能にするものがすでに内在するのである。そのような「社会的自我」をもつことによつて成立するある種の自己関係が、むしろ、いわゆる社会的関係の基礎となつてゐるのである。「我々は責務を人々の間の結び付きであると考えるが、責務とは何よりもまず我々各人を自己自身に結び付ける」(986)。それゆえ、理論的に言って他の人間にに対する義務を我々が持たないと仮定

してみても、少なくとも自己自身の社会化された部分に対しても我々は義務づけられないと考えられるのであり、この後者の義務の形態こそが社会的責務の本質を成すのである。

ベルクソンの考えでは、自己尊敬 respect de soi が原始社会においては個人と集団との連帶感情と一致し、ローマ市民にとって国家に対する感情と融合していたと思われるは、尊敬される「上位の自我」がこのよくな「社会的自我」にその起源をもつからである。⁽¹¹⁾ 尊敬される自我がそれ自身社会化されて社会の何ものかをすでに帶びているからこそ、自己尊敬が含意する自己関係は、容易に、社会的関係へとその意味をスライドさせていくことができるのである。

ベルクソンが功利主義的な道徳説に一定の評価を下すのもこれに關係している。個人は自己の利益を追求しつつ、それによって他人の利益を欲するようになるとこの学説は主張するが、多くの困難を抱えているものの、それは完全に支持できない学説というわけではない。なぜなら、この主張は、自己の利益か他人の利益かを選択しなければならない知的活動の下方にある、「個人的なものと社会的なものとがまったく融合しようとする、自然によつて最初に培えられた本能的活動」という基層 substratum (1006) によつて裏打ちされるからである。「社会的自我」が示唆するのは、個人的なものと社会的なものとが融合するこの本能的基層の存在であろう。「社会的自我」があること、それ

は、自我の内部すでに社会的な何ものかが成立してゐる」と、そのようにして個人的なものと社会的なとの截然とした分離が取り扱われることを意味するのである。

仮にアリが反省する」とができるとするならば、「アリは、自分の活動がアリの利益とアリ塚の利益との中間の何ものかに吊るされていると感じるだらへ」(ibid.)。本能的社會において成立しているであろう個体的なものと社会的なものとの融合は、我々の自我がそれ自身社会化されているという仕方で、人間社會においても存続していると考えられるのである。このように見る限り、社會はもはや個人の外部からそれに關係するとは言えないと、社会的自我」が形成されていだらう。自我の内部すでに「社会的自我」が形成されいるからであり、この自我に対する義務を果たすこと、すなわち自己自身に対する義務を果たすこと、「⁽¹²⁾」となるからである。

さて、個人的なものと社会的なものが関係する以上のように仕方は、ベルクソンの生命論における社會の規定から必然的に導出されてくるようと思われる。そこで最後に、社會に関する発生論的見地から、これまで述べてきたことを捉えなおしてみよう。

ベルクソンによれば、生命の進化において「個体化」individualizationが生じるのは、生命が、物質との接觸によつて、原初的に内包してゐた「莫大な潜在性」から諸要素を外化 exterioriser すゆからだある。すなわち、「物質は潜在的に多でしかなかつたものを現実に effectivly 分割するのであり、この意味において、個体化は、部分的には物質の所産であり、部分的には生命がそのうちに保持するもの結果である」(714)。

このよへに、ベルクソンは、生命進化とは諸要素の「連合 association」過程ではなく、「個体化」の過程つまり諸要素への「分化 dissociation」過程であると考える。したがつて、生命進化を通じて何らかの調和が認められるとするなら、それは、「連合」の末に到達されるべき目的論的調和ではない。ベルク

ソノは、もし調和があるとすれば、それは「前方にではなく後方に見出される」(533) のでなければならないとするのである。といへば、一見したところでは、生命進化をこのように見る部から拘束する力ではなく、むしろ個人の内部においてすでに働いてゐる傾向であつた。

生命の統一

これまでの考察によつて明らかになつたように、「單純事實」としての社會の基底を掘り起しけば、そこには社會を社會たらしめている自然的な傾向が見出される。その傾向は、個人を外部から拘束する力ではなく、むしろ個人の内部においてすでに働いてゐる傾向であつた。

らの諸存在の流出という一連の図式によつて、「分化」過程を理解する」とも可能だからである。反対に、「連合」過程の方が、「連合」の効果の解釈の如何によつては、ある種動的な統一概念を提供するようにも思われる所以である。

だが、これは調和という観念にまつわる錯覚である。たしかにベルクソンは、調和が「前方にではなく後方に見出される」と言つたが、生命進化の源において調和が現実に存在するといふことを積極的に主張したのではない。なぜなら、調和どころか観念は、それ自身、あらかじめ分割された諸要素の同時的表象を容易に喚起し得るからである。ベルクソンはいのうと十分に了解していたので、慎重にも「調和はむしろ権利上存在する」(ibid.)へ述べたのである。そのよつては調和という観念のもつ危険性を認識して、ベルクソンはその意味をより正確にいふ限定する。「進化の過程は、東状に広がるものであるが、はじめは融合するほどに極めて相補的であつた諸項を、その数が一齊に増大するにつれて、相互に引き離すのであり、調和とはこのことに由来する」(595、傍点は筆者による)。もはや調和は後方にすら存在しない。調和があるとすれば、その根拠は、生命進化を通じて行われる諸項の「分化」過程そのものに求められなければならないのである。

したがつて、「分化」の指し示す統一は、「分化」に先立つ限りにおいて、あるいは逆にあらかじめ「分化」した諸要素を取

りおとせるべく要請される限りにおいて見出される統一ではあります。ベルクソンは、そつした機械論的、目的論的な統一を「悟性が外部から自然に対して課す作為的統一 unité factice」(664)であるとしている。それに対して、生命の統一 *unité vraie, intérieure et vivante* (ibid.)と呼ぶのである。

社会の生成の根柢についても同様に考えなければならぬ。生命が物質との接触によつて「個体化」の方向に進むことでも、「分化した諸個体の間で、依然として生命が環流し、至るところ、個体化する傾向は、対立し補完的な連合する傾向 tendance antagoniste et complémentaire à s'associer によって抑制され、同時にそれじみで完成される parachevée」(714)。

「個体化」に相伴つての「連合する傾向」は、生命進化を「分化」過程と捉えたベルクソンが反対に退けたといひの「連合」過程のことではない。後者における諸要素の「連合」は、諸要素を取りまとめ統一すべき原理を、諸要素の呈する多數性の外部に要請する。なぜなら、諸要素はすでに現実に分離されているからであり、その多數性は現実的な多數性だからである。

一方、「個体化」に相伴つて「連合する傾向」とは、すでに述べたよつては、潜在的に多でしかなかつたものが物質によつて現実に分割されたことで生じた現実的な多を、本源的で潜在的な多

に押し戻そつとする傾向に他ならない。その傾向は、たしかに

個体化する傾向に「対立する傾向」ではあるが、しかし、生命

の「莫大な潜在性」において成立している「多なる」 unité multiple」 (*ibid.*) に由来する限りにおいて、それは「個体化する傾

向」に「補完的な傾向」であり、「個体化する傾向」をむしろ「完成する」ものである。社会の起源は、」のよつて、生命の「多くなる」」が、現実的な多的方向へ外化されつつも、「血」自身に向かって収縮し直す se rétracter sur elle-même」 (*ibid.*) 働きにおいて探求されなければならないだらう。

「」のよつて見るならば、社会的なものが個人的なものに内的に関係し、そのよつてにして「わば統一」するあり方が、以上のような社会の発生論的な規定そのものに立脚してることが確認されるだろう。生命の統一が「分化」に先立つて諸要素の外部から行われるのではないのと同様に、社会は自足していれる「最高権威」として個人をその外部から拘束するのではない。また、生命の統一があらかじめ「分化」した諸要素を取りまとめるべく事後的に要請されるのではないのと同様に、社会は個人が相互に取り結ぶ偶然的で規約的な契約にとどまるのでもない。社会の起源が、「個体化する傾向」に対立しつつも補完的な「連合する傾向」に存し、そのよつて「分化」過程そのものに根ざすがゆえに、社会的なものは個人的なものに内在的なのであり、その内在的関係を「社会的自我」の存在が指し示してい

るのである。

おわりに

本稿の考察の対象は、見られるよつて、ベルクソンの語る「閉じた社会」の生成に限定されてくる。」の点で、本稿はベルクソンの社会論のすべてを論じわけではない。我々は自我の表層を覆う「社会的自我」において成立する平衡 équilibre をのみ扱つたが、しかし、ベルクソンは、やがて進んで、「我々自身の最も深いところにおいて、もしそれを探すことができるなら、我々はおそらく、表層的な平衡よりも、いそゞ望ましい、別の種類に属する平衡を発見するだらう」 (986) と述べている。自己自身の深みを掘り下げるには「努力」が必要であるが、そのようにして個人的なものの最深部へ至る」とによつて、より確固とした安定を得るとができるとされる。⁽¹³⁾ 我々の見解では、そこでは、「社会的自我」におけるのとは別の次元において、個人的なものと社会的なものとが融合へ向かうのではないかと思われる。それがいわゆる「開いた社会」のあり方に関係しているのであろう」とは容易に予想されるが、これについては稿を改めて論ずるべきであろう。

ベルクソンの著作からの引用は生誕百年記念版著作集 (*Oeuvres*, puf, 1991.) の頁数を本文中に挿入する」と示し、参照箇所は註に記す。

(1) デュルケムが「社会的事実 *fait social*」の觀察を重視する」とから考へて、社会を「単純事実」と見なす」とを拒否する点においてベルクソンのデュルケム批判を見ることがどうも。デュルケムが人間社会と本能とのいかなる類縁性も認めないと考へて、ベルクソンは社会的事実的な側面を離れてその生命的基底へと掘り進み、そこに「潜在的本能」を見出すのである (Durkheim, E., *Les règles de la méthode sociologique*, Flammarion, 1988., p.200.)。

(2) p.1022.

(3) p.1045.

(4) pp.298-301.

(5) デュルケムによれば、「社会的事実」の「外的表徴 *signe extérieur*」とは個人に対する外在性と強制力であり、それこそが社会学の出発点とすべき与件である。およそ社会学が科学的客觀性をつためには既成の諸観念を取り払い、事実の里するそのような明白な性質の觀察から出発しなければならない。むつとも彼は「外的表徴」そのものに固執するつもりはないと言ふ。外在性と強制力は必ずしも实在の本質に直結するのではなく、ただそれに到達するための最初の手がかりを提供するのみにすぎないというのである (Durkheim, E., *op. cit.*, pp.135-136.)。しかしながら、そのようく実証的な態度を標榜しているものの、やはりそこには、社会の本質は外在性と強制力でなければならぬといふ自身の社会に対する考え方が反映されていると言わざるを得ないだろう。

たとえば、個人が社会的責務に自発的に同意する場合、デュルケムは「個人にとっても強制を感じられない」とはいえ「*」*の同意が責務からその命令的性格を取り除くわけではなし」 (Durkheim, E., *op. cit.*, p.197.) とする。個人がそれに抵抗すれば強制力が自覺されるのであり、「*」*の外的な強制力が、抵抗を受ける場合に判明に

現れるとするなら、反対に抵抗のない場合にも、無意識的なものはあれ、それが存在するといつてもいいのである」 (Durkheim, E., *op. cit.*, pp.98-99.)。このように、デュルケムは、個人の抵抗を介してはじめて明瞭になる社会の強制的性格を、抵抗の不在の場合において見られる非強制的性格よりも、社会にとってより本質的なものであると見なしているのである、事実の「外的表徴」にはすでに彼自身の解釈が含まれていると思われる所以である。

その証拠に、ベルクソンは、同じ事態を問題とするにもかかわらず、それに対しても、ベルクソンとは異なった解釈を与えていた。すなわち、ベルクソン自身も社会の強制的性格を認めはするものの、それは抵抗そのものが作り出した性格であり、社会の本質には本来含まれていない事柄だとされる。本文で述べたように、デュルケムとは反対に、ベルクソンは抵抗の不在において社会の本質を見出すのである。

(6) p.991.

(7) *Ibid.*

(8) p.990.

(9) pp.991-992.

(10) ベルクソンが無意識を一種類に区別したことは有名である。落丁する右の無意識は、右自身が自らの落丁についてかかる感情ももたない以上「無い意識 *conscience nulle*」と規定すべき無意識である。他方、本能的活動や習慣的行為に固有の無意識は、「表象が行為によつて遮られてゐる」といふに起因する無意識であつて、「無化された意識 *conscience annulée*」と見なされるべき無意識でなければならない。前者が意識の不在を意味するのに対して、後者は、單に、行為による意識の相殺、中和を意味するのである。そして、行為遂行が何らかの障害によつて妨げられたとき、それまで無化されていた意識が発出するのである (617-618)。

(11) p.1031.

(12) この点から見て、ベルクソンの提示する社会概念は自然法droit naturel の考へにある程度近いものだと見える。社会的なものは個人の

(13)

自我に内在するが、それを、社会が人間本性のうちから自然的に発生すると言い換えてもさしあたり問題はないだろう。だがその場合でも、厳密に言つて社会が個人の本性のうちから発生するとは言えまい。社会は個体への分化と同時に生成するのであり、社会生活への傾向はあらかじめ分裂してしまつてゐる諸個人のそれぞれの本性から生じるのではないからである。

ベルクソンは水草の例で説明している。「水面にまで伸びてくる水草は、流れに絶えず振り動かされる。その葉は水上で一緒になりながら、重なり合うことによって、上方で、水草に安定 *stabilité* を与えてくる。しかし、根の方が、川底にしつかりと植わつてるので、いつも安定しており、水草を下方から支えているのである」(986)。